

## ルカによる福音書14章25-27節 「自分を憎む道」

### 1A 第一の愛 26

### 2A 生存本能 26

### 3A 権威への服従 27

#### 本文

ルカによる福音書 14 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 13 章まで来ました。14 章を午後礼拝で一節ずつ学びますが、今朝は 25 節から 33 節までに注目します。

25 さて、大勢の群衆がイエスと一緒に歩いていたが、イエスは振り向いて彼らに言われた。26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

群衆たちが、イエス様について言っています。大勢、とありますから、大勢の人たちがついて言っています。けれども、イエス様ははっきりと、家族をも憎んで、自分のいのちをも憎まない、わたしの弟子になることはできません、それから、自分の十字架を背負わないと、わたしの弟子になることはできません、と言われていました。これは、イエス様がどちらも通られた道ですね。ご自身のところに、母や兄弟たちがイエス様を引き取りにやってきた時に、イエス様は、「わたしのことばを聞いて、守る者たちが、兄であり、母であり、妹です」ということを言われました。そして、ご自身が十字架を背負われて、十字架に磔にされる道を歩んでおられます。

主は、多くのフォロアーを欲している訳ではないようです！ツイッターなどで、フォロアーという言葉が定着しましたが、それは「ついて行っている人たち」です。フォロアーが増えればそれだけ、ツイッターのアカウントの主は喜ぶのですが、イエス様は、ご自身に付いてくる人たちが大勢でも、全然、喜んでおられません。「イエスは振り向いて彼らに言われた。」とありますが、主は、ここでかなり厳しい表情をして語られたのかもしれませんが。あるいは、憐れむような表情で語られたのかもしれませんが。彼らのことをこよなく愛されていますが、警告をしておられます。イエス様について行くということには、「覚悟が必要です」ということです。

しばしば、私たちはとても危険なミッションを果たす時に、そのリーダーが隊員に、「このミッションに行く者は手を挙げなさい」と言ったりしますね。消防隊員が、火の手が上がった家から人々を助け出す時に、自分自身も火傷して、最悪な場合死んでしまうからかもしれません。戦闘の中にいる部隊が、仲間が敵に人質にさらわれたら、救出するにもかなり危険なミッションとなります。「行く者は

いるか？」と尋ねます。心の準備ができている者たちだけが、その働きの中に従事できるからです。

聖書にも出て来ますね、ギデオンです。13万5千人いるミディアン人の陣営を前にして、3万2千人しかあつまりませんでした。しかし、なんと主は、「だれでも恐れおののく者は帰り、ギルアデ山から離れよ。」と言われました。それで2万2千人が帰ります。残りは1万人ですが、なんと主はさらに選り分け、ハロデの泉から出てきている水辺に連れて行き、こう言われたのです。「犬がなめるように、舌で水をなめる者は残らず別にせよ。また、飲むために膝をつく者もすべてそうせよ。」そして、「手で口に水を運んですすった者の数が三百人であった。」とあります(士師 7:4-7)。その三百人で戦わせたのです。それは、膝をついて水を飲んだということは、その間に敵が襲えば、やられてしまいます。いつも戦う態勢の取れている者たちで戦いなさい、ということです。

### 1A 第一の愛 26

では、本文をもう一度見ていきましょう、26節です。「**わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。**」ものすごい強い言葉をイエス様は使われていますね、「憎む」と言われています。ここでイエス様が、感情を込めて家族を憎むということと言われていないのは、明瞭です。十戒において、「あなたの父と母を敬いなさい」とあるし、イエス様は母マリアを、ご自分が十字架に付けられていた時に、ヨハネに彼女を引き取ってほしいことを伝えられました(ヨハネ 19:27)。ここでイエス様は、感情をもって憎むことを話しているのではなく、むしろその反対を語っておられるのです。イエス様を第一に愛して生きることを、主は語られているのですが、家族が地上において最も大切な結びつきであるがゆえ、だからこそ、イエス様への愛が第一にならない妨げになってしまうのです。

今の時代は、終わりの日であることを私たちは聖書から学んでいます。終わりの日の特徴は、「自己愛と、自然の結びつきの分断」であります。「Ⅱテモ 3:2-4 そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快樂を愛する者になり…」ここで話されているのが、両親に従わない、人と和解しない、中傷するなど、人とのつながり、家族とのつながり、また他の人々とのつながりを自己愛で破壊している姿です。

パウロは、「天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。(エペ 3:15)」と祈りました。ここに明確に、地上にある家族と付くすべてのものが、神によって造られ、尊ばれていることが分かります。中東では今でも、血縁関係がないのに年上の方が若い人に、「我が子よ」と言って見たりします。お隣の国、韓国でも、少し知り合いになっただけで、若い人たちも年上の男性には、女性は「オッパ」と言って、年上の女性には「オンニ」と言いますね。お兄さん、お姉さんの意味です。家族のような絆がそこに生まれています。このようにして、私たちは互いに

つながっているのです。そしてもちろん、御霊によって新しく生まれた者たちは、「神の家族」と呼ばれます。今の時代の悲惨は、その意識がないと教え込まれていることです。個々の集団が寄り集まっている共同体にしか過ぎないと思っています。ですから、何か気に食わないことがあると、「ここにはいられない」として、他の集まりを探すのですが、家族だったら、気に食わなくとも付き合いようなつながりなのです。そういったつながりだからこそ、私たちは深い献身、責任関係を持つことができます。

ですから、そのつながりをとても大切にする必要があります。パウロは、テモテ第一 5 章 8 節で、「もしも親族、特に自分の家族を世話しない人がいるなら、その人は信仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです。」と言いました。ここからも家族がいかに大事であるか、神ご自身が御心としておられることが分かります。

ですから、イエス様が言われた「憎む」という言葉は、むしろ家族のことが大事だから、愛すべき存在だから言われた言葉なのです。普通に考えたら、家族が第一なのです。けれども、実はそうではありません。「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」神は、私たちを愛されて、ご自分の最高のものを差し出されました。イエスご自身です。この方を人として遣わし、この方において神と自分との間を仕切る罪を取り除いてくださいました。このキリストにあって、私たちは神と結ばれ、命を持つのです。それは、人であるかぎり、みなはその霊的な幸いにあずかる必要があります。このことが、何よりも大事なことであり、地上においては家族が第一であっても、それよりも大事なことなのだということです。

そうすると、激しい内なる葛藤があります。家族は大事だけれども、敢えてイエス様について行くことを選びます。神の真理を選び取る必要があります。その時に、その大事なものを第二のものにする、一時、退ける必要があるのです。そこで「憎む」という言葉をイエス様は使われています。同じように使われているのが、創世記において、ヤコブとエサウが出て来て、兄であるエサウではなく、ヤコブを神が愛し、選ばれたことが書かれていますが、マラキ書で主は、「わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み(1:2-3)」と言われています。エサウは兄ですから、長子の権利があります。けれども、主は彼らがまだ母の胎にいる時に、敢えてヤコブを愛し、選ばれます。エサウが後に長子の権利を侮るということはありませんが、ヤコブを選ばれたのは、主がもつぱら彼を愛されたからです。ゆえに、エサウが退けられたことを、「憎む」という言葉で言い表しておられます。

アブラハムが愛する独り子、イサクを捧げた時に、彼が取った行動も「憎む」ということでした。独りの子を献げるということを、その愛よりも、主を恐れ、主を愛するということを選び取り、従いました。そして私たちの神ご自身が、その選択を取られたのです。ご自分の独り子を、その限りない愛を注いでおられましたが、御父は御子を私たちを罪から、滅びから救われるために、お捧げになら

れたのです。であれば、私たちもこの大きな愛、至上の愛に応答する時に、地上の家族など、大事な存在がありますが、それをも主にお任せして、イエス様にお従いします。

## 2A 生存本能 26

そしてイエス様は、「さらに自分のいのちまでも憎まないなら」と言われました。この言葉で、さらに憎むことの意味が実際のそれではないことが分かるでしょう。命を憎んで、自殺でもするのか？という、全くそうではありません。イエス様が、父なる神の御心に従うために、ゲッセマネの園で祈られたあの祈りですね、「この杯を過ぎ去らせてください、けれども、あなたの願われるようにしてください」と祈られた時に、いのちを憎むということを行われました。

イエス様は既に弟子たちに、「19:24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。」と言われました。人が生きようとする生存本能は、はかりしれないものです。私たちのしているあらゆる行動は、生き残るためにやっていると言われても過言ではありません。もちろん、方向性を誤って行っていることもあるのですが、しかし、自分を保つための方法を探して生きています。

先に話しましたが、「自分のいのちを憎む」ということですが、俗にいう「自分のことが嫌い」というのと全然違います。自分のことが好きになれない、自分が嫌いだというのは、ここでの聖書の意味では、まだまだ自分のことが大好きなことの裏返しです。「エペ 5:29 いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。」「私は醜い、私のことが嫌いだ。」と言って鏡を見ているとします。けれども、本当に嫌いなのなら、醜いままのほうがいいじゃないですか？という突っ込みができますね。嫌いだ、と言っているのは、まだ自分がきれいになりたいという願望があるからで、やはり自分のことが好きなのです。自殺でさえ、自分の命を救っている行為と言えます。自分というものを生かしたまま、命を絶っているからです。本当に絶望しているなら、自殺する気が起こらないほど絶望しています。

自分のいのちを憎む、とは、自分のあらゆる可能性に死ぬことです。自分には善がある、神に救われるべき何か原因があるはずだということに死ぬことです。自分は、神によく思われる資格は何一つないのだと悟ることです。自分が救いもないような罪人であることを知ることです。そして、キリストにある神の恵みが、自分のいのちにまさることを知って、神の恵みに生きることにかけることです。「詩篇 63:3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、わたしの唇は、あなたを賛美します。」

私たちの周りには、あまりにも自分のいのちを救うことができるもので満ちています。日々の糧はもちろんのこと、安全もありますね。病気になると言っても、きちんと健康保険で病も癒されます。そして主にある楽しみといっても、何かもっと楽しいことはたくさんあります。神の家族といっても、自分の周りにはもっと仲良くできるサークルみたいなものがあるかもしれません。神がいなくても、

やっつけられるのです。もし、そうしたものがなかったら、どんなにか神にしか自分を支える方はいないと容易に悟ることができるのですが、私たちの周りには思い煩いをもたせる誘惑があまりにも満ちあふれています。そうではなく、私はイエス様なのだ！と叫んで、それで主に従う時に、いのちを憎むという行為をしています。

### 3A 権威への服従 27

そして、27 節、「**自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。**」とイエス様は言われます。ここで彼らにとっての十字架をお話します。時はローマ帝国です。ローマは、パクス・ロマーナと呼ばれて、平和と繁栄、秩序が帝国に広がっていました。反逆する勢力をほぼ鎮圧し、アウグストゥスが第一の皇帝になりました。けれども、平和に生きていくには条件がありました。ローマに反逆しない、ということです。もしローマに反逆するならば、この十字架刑が待っています。これは、ローマから独立したい、お前たちの奴隷ではないとする思いを、徹底的に挫くためです。十字架は、極刑であり、そして見せしめのためでもありました。ローマに反抗するなら、お前たちもこうなるのだという見せしめです。北朝鮮で、銃殺の公開処刑が今も行われていると言われますが、ローマは平和と繁栄に満ちていると言われていても、自由がなかったのです。

その自由を激しくユダヤ人たちは求めていました。そして聖書には、メシアが異邦の諸国の頸木を打ち砕くという約束がされています。それで彼らは、そういった自由をメシアに対して期待していたのです。ところが、イエス様はその真逆を語られました。「**自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。**」であります。十字架の頸木から解放されるのではなく、敢えて自ら、十字架を背負いなさいと言われているのです。

これはどういうことでしょうか？「世にある権威は、主から来ている」ということです。イエス様がポンテオ・ピラトの前に連れて来られた時に、ピラトはイエス様に、「ヨハ 19:10 私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」と尋ねました。「19:11 イエスは答えられた。「上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。」イエス様には、余裕がありました。ピラトには、十字架に付ける権威があり、釈放する権威がありました。これらは恐るべき力であり、大きな権威です。けれども、その権威そのものが、ご自身の父から出たものであることをご存じだったのです。ですから、ピラトがいかに権威をふるまおうとも、それは父から出たものであるから、ご自身はただ従うのみである、という心の余裕があったのです。こうやって、世の権威にイエス様は従われたのでした。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」このようにして、世にある権威であっても、それは主から来ているものとみなして、それに服従するという自由があることを教えているのです。



これを私たちに当てはめるとどういふことになるのでしょうか？自分の置かれている状況、自分の周りにあるもの、それらがいかに不快であっても、それに対する恨みや怒り、憎しみを抱かかずに、主のみこころだと知って受け入れ、従うことであります。

使徒たちの手紙には、この従うという姿勢を、誰もが一貫して教えています。パウロが手紙を一番多く書いていますが、例えばエペソ書には、「5:22 キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」と勧めています。そして、「5:23 妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。」と教えています。夫がいかに欠けたものがあったとしても、それで不満をためて、怒り、恨むのではなく、主が夫を自分に置いてくださったのだから、夫に従うのは、主に従うことなのだ、ということです。そこにある、力強い神の御手を認めて、受け入れることです。そして子供たちに対して、「6:1 子どもたちよ。主にあって自分の両親に従いなさい。」ここでも同じです、子供は主を知ることが第一です。ゆえに、両親は神が置いてくださったので、主にあって従うのです。それから、「6:5 奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。」と書いています。

ペテロは、迫害を受けているキリスト者に対して第一の手紙を書きました。そこでは、王を敬いなさい、総督に従いなさいと勧めています。「Ⅰペテ 2:13-15 人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることは、神のみこころだからです。」主にゆえに従いなさいとペテロは言っています。続けて読んでいくと、主人に奴隷が従いなさい、意地悪な主人にも従いなさいと言うんですね。なぜか、それは神を喜ばせることになり、キリストの道を歩むことになるからだということです。イエス様の十字架への道が、罵られても、苦しめられても仕返しをすることなく、「正しく裁かれる方にお任せになった」とあります(2:23)。そして、妻に対しても、御言葉に従わない夫であっても、従いなさいと勧めます。その無言のふるまいによって、神のものとされるからだと言っています(3:1)。

そしてヨハネも同じです。第一の手紙で、「神を知っていると言いながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちには真理はありません。」と言っていますが、その命令とは第一に、「自分の兄弟を愛している」ということです(1:4,10)。そして兄弟を憎む者は、神を知らないし、神から生まれていないのだとまで断言しています。私たちは、あまりにも自分に当然の権威があると思っています。憎んで、恨んで、当然ではないか？と思うのです。もちろん、憎んでしまう、怒ってしまう、恨んでしまう自分がいて、それが情けないと思っている話をしているのではありません。そういう自分の至らなさを知り、罪を憎み、そして主に立ち返る第一歩だからです。ここでは、そうではなく、兄弟を恨むこと、憎むことが当然であるかのように、それをずっと抱き続け、正しいことであるとみなしていることです。

しかし、それは十字架の道ではないのです。十字架の道は、従うことです。いろんなことが自分

の目の前に起こっても、それでも、それは主の許されたこととして、主にお従いするので、従うのです。任せるのです。そして、主が必ず、道をまっすぐにしてください。「箴 3:5-8 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。自分を知恵のある者とする。【主】を恐れ、悪から遠ざかれ。それは、あなたのからだに癒やしとなり、あなたの骨に潤いとなる。」

実は、従う道は自由になる道です。神が御心として置いておられるところに、反発することこそ、徒勞のことはありません。へりくだって、その中に誠実に生きる時に、どれほどの恵みを主は示して下さることでしょうか。自分がなくてよい、主が行って下さるのだ！そして、キリストを主とあがめている中で、主が自分を用いて下さって、自分ではしていないのに、聖霊が周囲の人たちに影響を与えて下さるようになります。群衆のように、自分の益になることを求めるのではなく、自分を捨てて、今まで絶対に捨てないとして愛していたものを、主のゆえに一旦、横に置いてみてください。主が必ずや、これまでになかった広い道、平らな道をお見せになります。